

史料にみる茨木城

木村 健明

1. はじめに

令和2年度から3年度にかけて、大阪府教育庁が主体となり、北摂地域の中世城館総合調査が実施された。茨木市教育委員会においても市内に所在する城館について史料の収集や既往の発掘調査事例の調査を行った。

その結果、特に茨木城と三宅城は多くの文献に記述が認められる一方、考古学的な様相は未だ不明であることが改めて認識された(註1)。

本稿は、茨木城に関する史料の集成を目的としている。また、記述の都合上、茨木氏についても史料を集成した。

史料は、『新修茨木市史』通史Ⅰ・通史Ⅱ・資

料編古代中世・近世(註2)、(森田2009)、(中村編2007)、(馬部2018)など関連する研究成果や東京大学史料編纂所のデータベースを参考として収集した。

2. 茨木氏について(表1)

まず、初期の茨木城と密接に関連する茨木氏について述べる。表に示したように現時点での初見は、貞和5年(1349年)の「鳥居造立条々注文」(1)である(註3)。

この史料では、馬引代銭として「茨木東太郎次郎」が一貫文を出している。他に「吹田西彦五郎入道」、「三宅乾肥前左衛門入道」も認められる。

表1 茨木氏・茨木城関係一覧表(貞和5年～文明13年)

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
1	貞和5年(1349年)	—	勝尾寺文書661 「鳥居造立条々注文」	「一貫文 茨木東太郎次郎」	『箕面市史』史料編二	
2	貞治元年(1362年)	—	今西家文書5 「垂水西牧穂積名寄帳」	「貞延」名に「茨木分」が見える。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
3	正長元年(1428年)	—	今西家文書59 「新大般若会料坪付取納帳」	大般若会料を負担した田の一覧で「茨木方」が「加納六条一り」に6ヶ所確認できる。		
	永享3年(1431年)	8月	今西家文書59 「新大般若会料坪付取納帳」	大般若会料を負担した田の一覧で「茨木方」が合計15ヶ所確認できる。		
4	永享6年(1434年)	2月25日	満濟准后日記	「管領内者イハラ木」	『統群書類従・補遺一』	管領は細川持之 細川内衆
5		5月13日	満濟准后日記	「自管領使者来。安富紀四郎就茨木事。書状ニテ申旨在之。」		細川内衆
6		6月9日	満濟准后日記	「茨木二千疋折紙同進之」		細川内衆
7	文安元年(1444年)	5月12日・14日、9月11日・12日・13日	犬追物手組日記	「茨木近江入道」が犬追物手組、「茨木三郎」が喚次として見える。	『群書類従・第二十三輯』	細川内衆
8	文安4年(1447年)	12月15日	熊野那智大社文書289 「旦那宛券」	善阿弥が売却した旦那職の中に「伊原木一族地家」が見える。	『熊野那智大社文書』第一	
9	文安年中(1444～1449年)	—	文安年中御番帳	奉行衆に茨木がみえる	『群書類従・第二十九輯』	細川内衆
10	宝徳元年(1449年)	11月2日	東寺百合文書 に函 「大山莊段銭請取状」218・ 「大山莊段銭請取状案」 219・220	差出人として「茨木近江入道宗安」が見える	『東寺文書』1	細川内衆
11	享徳元年(1452年)	10月12日	犬追物手組日記	「茨木彈正左衛門尉」が犬追物手組として見える。	『群書類従・第二十三輯』	細川内衆
12	応仁元年(1467年)	5月	応仁記「所々合戦之事」	「三宅。吹田。茨木。芥川等ノ諸侍ニ仰セテ」「平賀方所ヲ責ラルル也。」	『群書類従・第二十輯』	上京の戦い 茨木氏は東軍方
13	文明2年(1470年)	5月22日	野田彈正忠泰忠軍忠状	薬師寺与次・四宮四郎右衛門尉、西軍の茨木城を落とす	『大日本史料』第八編之一	茨木城は西軍方
14	文明10年(1478年)	正月18日	大乘院寺社雑事記	「禪閣ハ細川之内者イハラ木在所ニ御遷」	『大乘院寺社雑事記』六	細川内衆
15		正月23日	晴富宿祢記	「一条禪閣御在所イハラ木宿所也」	『晴富宿祢記』	細川内衆
16		4月2日	賀茂沢雷神社文書	茨木孫次郎が賀茂社領を押妨するのを禁止	『大日本史料』第八編之十	
17	文明11年(1479年)	—	今西家文書33 「御般若会名指出帳」	「茨木方」が1ヶ所確認できる。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
18		—	今西家文書35 「御牧友忠名指出帳」	「茨木方」が合計7ヶ所確認できる。		
19		—	今西家文書37 「小曾祢四郎太郎名指出帳」	「茨木方」が9ヶ所確認できる。		
20		—	今西家文書39 「御牧光末名指出帳」	「茨木方」が1ヶ所確認できる。		
21		—	今西家文書40 「御牧不断名指出帳」	「茨木方」が1ヶ所確認できる。		
22	文明13年(1481年)	12月25日	賦引付	茨木孫右衛門、溝杭菊才丸から五貫文を借りている	『室町幕府引付史料集成』下巻	

この三者の名字は次節で述べる摂津国人一揆の中心となった国人と同じであるため国人領主と考えられている（石本 2009）。

続いて認められるのは、『今西家文書』である。貞治元年（1362年）の「垂水西牧穂積名寄帳」（2）の貞延名に「茨木分」が認められ、得分権を持っていたことが分かる。

『今西家文書』では、正長元年（1428年・3）、永享3年（1431年・3）、文明11年（1479年・17～21）、長享元年（1487年・28～31）・2年（1488年・32）、永正12年（1515年・58）・13年（1516

年・59）・14年（1517年・60）、大永4年（1524年・64）に得分権を持っていたことが確認できる（註4）。

上記の『今西家文書』以外に、京都での細川氏被官（内衆）としての活動が、永享6年（1434年）以降確認できる（4～8・9～11・14・15）。

また、京都に前関白である一条兼良が滞在できる屋敷を構えていた（14・15）。

福留氏は、「茨木氏には、内衆として京都に拠点をおく者と、国人として茨木に拠点をおく二家があった」としている（福留 2012）。

表2 茨木氏・茨木城関係一覧表（文明14年～永正4年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
23	文明14年 (1482年)	6月19日	大乘院日記目録	「細川九郎替陣於井原木邊」	『大乘院寺社雑事記』十二	摂津国人一揆
24		6月22日	大乘院寺社雑事記	「官領（細川政元）ハ井原木ニ取陣」	『大乘院寺社雑事記』七	摂津国人一揆
25		閏7月12日	大乘院寺社雑事記	九日に「伊ハラ木父子以下六七人自害」、所領は薬師寺備後が接収する。	『大乘院寺社雑事記』七	摂津国人一揆
26		11月7日	大乘院寺社雑事記	吹田庄の内、成枝名は「井原木」に任される	『大乘院寺社雑事記』七	摂津国人一揆
27	文明16年 (1484年)	12月25日	多聞院日記	春日若宮おん祭りに際して、吹田庄割り当て分の流鏑馬五騎の内、二騎半を「成枝方茨木ノ弥三郎」が負う	『多聞院日記』一	
28	長享元年 (1487年)	—	今西家文書55 「毎月御神供同供菜持足帳」	「茨木方」が8か所に見える。	春日大社南郷目代 今西家文書	
29		—	今西家文書56 「毎月御神供同供菜持足帳」	「成枝方」の沙汰人として「茨木藤次郎」が見える。		
30		—	今西家文書57 「撰州所々取帳」	「茨木」「茨木方」が7か所に見える。「成枝方」の沙汰人として「茨木藤次郎」が見える。		
31		—	今西家文書60 「御神供米取納帳」	「茨木方」が17か所に見える。		
32	長享2年 (1488年)	—	今西家文書61 「垂水西牧西方三ヶ村毎月御神供米帳」	「いはらき方」が3か所に見える。		
33	延徳2年 (1490年)	3月6日	大乘院寺社雑事記	細川政元 「昨日五日撰州下向」	『大乘院寺社雑事記』九	
34		3月21日	北野社家日記	細川政元 摂津国蒔木に滞在	『北野社家日記』第二	
35		9月	蓮成院記録	「撰州茨木 薬師（寺脱）備後守之宿所也」	『多聞院日記』五	
36		9月5日	晴富宿祢記	細川政元 摂津下向	『晴富宿祢記』	
37		12月3日	蓮成院記録	細川政元 茨木辺まで下向（少なくとも十二月下旬にも撰州在国、茨木辺居住）	『多聞院日記』五	
38		12月3日	晴富宿祢記	細川政元 撰州茨木に狩りのため下向	『晴富宿祢記』	
39		12月4日	大乘院寺社雑事記	「細川昨日向撰州」	『大乘院寺社雑事記』九	
40	明応2年 (1493年)	2月4日	蔭涼軒日録	「政元公在接州井原木」	『蔭涼軒日録』五	
41		卯月30日	勝尾寺文書1014	「御出陣人夫之事 合拾人者」「不移時日茨木へ可被進」	『箕面市史』史料編二	
42	明応8年 (1499年)	10月15日・22日	大乘院寺社雑事記	十三日に細川政元 茨木下向、二十二日には近日帰京し、河内へ出陣すると伝えられる。	『大乘院寺社雑事記』十一	
43		12月25日	鹿苑日録	「遺書於撰州薬師寺宣都文」（二十七日に返書あり）	『鹿苑日録』巻一	
44	明応9年 (1500年)	10月21日	宝珠院文書	薬師寺元長 後土御門天皇の葬儀後摂津へ下国すると述べる	古野2013	
45	文亀元年 (1501年)	3月16日	言国卿記	備前国居都庄の年貢について、使者が薬師寺の居所である茨木へ（使者は十九日帰洛）	『言国卿記』第七	
46		4月19日	言国卿記	使者が茨木より帰洛する。		
47		5月12日・13日	忠富王記	堺から京への帰途、十二日に「イハラキ」に泊まる。	『伯家五代記』	
48		8月3～7日	九条家文書2125	三日に使者を茨木へ（六日に茨木へ到着、七日に返事）	『九条家文書』七、馬部2018第一部第四章	
49	永正元年 (1504年)	9月4日	神足家文書	四日「四宮いはらきよりきたり」	馬部2018第一部第四章	薬師寺元一の乱
50		12月13日	大乘院寺社雑事記	細川「屋形ハイハラキニ在国」	『大乘院寺社雑事記』十二	
51	永正2年 (1505年)	正月20日	今西家文書64 「毎月御供帳」	茨木方として「四郎太郎・貞久・為重・為広」が見える。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
52		6月	今西家文書65 「南郷五ヶ村段銭帳」	「平田方」に「茨木へ度々夫チン百五十文」が見える。		
53		—	今西家文書66 「南郷五ヶ村段銭帳」	「茨木へ両度糧物五十文」		
54	永正4年 (1507年)	7月28日	多聞院日記	「今日津国牢人共一が子万徳丸令出張、則茨木城没落云々」	『多聞院日記』一	永正の錯乱

この他、複数の「茨木氏」が確認できたが、二家のいずれか判断できないので、個別に記す。

文安4年(1447年)、善阿弥が定賢房・定泉坊に売却した旦那職の中に「伊原木一族」が見える(8)。

文明10年(1478年)、茨木孫次郎が賀茂社の末社である奈良社領を押妨したことを咎められている(16)。

文明13年(1481年)には溝杭菊才丸に五貫文を借りた茨木孫右衛門が訴えられている(22)。

一方、武士としての茨木氏の活動は、応仁元年(1467年)に勃発した応仁の乱における京都での戦い(上京の戦い)で確認できる(12)。細川氏が摂津守護であるため、摂津国人衆は東軍に属したと考えられる。

しかし、西軍の大内氏が6月に上洛した際に、摂津国人衆は一蹴されている(註5)。茨木氏はこの時点で西軍に降伏した可能性がある。

少なくとも、翌文明2年(1470年)に「西軍方」の茨木城が落とされているため、東軍方としてはこれ以前に落城していたのであろう(13)。なお、この「野田弾正忠泰忠軍忠状」が茨木城の初見である。

3. 摂津国人一揆について(表2)

摂津国人一揆は、文明11年(1479年・註6)から文明14年(1482年)にかけて、摂津国上郡(註7)の国人が起こした一揆である。文明11年から文明13年(1481年)にかけては特に動きは見えないが、文明14年に細川政元と畠山政長が鎮圧に乗り出す(23～26)。

表では「茨木」の見えるもののみを上げたが、三宅氏・吹田氏に関係した記事もあり、茨木氏を含めた三氏が一揆の主体であったと考えられる(石本2009)。

三宅城は3月13日に没落し(註8)、細川政元は6月18日に「吹田館」(註9)、22日には「井原木」に陣を構えている(24)。

閏7月9日に茨木氏は「父子以下六七人自害」させられ、その所領は摂津守護代の薬師寺元長が接收している(25)。

この後、10月16日に吹田氏が攻略され、その所領は細川政元の領所となる(註10)。この結果、三氏は大きく勢力を後退させたと考えられる。

ただし、直後の11月7日、細川政元によって茨木氏に吹田荘成枝名が任される(26)。

これには薬師寺氏から異議が唱えられたが、文明16年(1484年)の春日若宮おん祭り、「成枝方茨木ノ弥三郎」が流鏝馬錢五騎中二騎半分を負担していること(27・註11)、長享元年(1487年)に「成枝方沙汰人」として「茨木藤次郎」が見えること(29・30)から、異議は認められず、茨木氏が引き続き知行していたのであろう。

また、摂津国人一揆で、茨木氏が滅亡した訳ではないことが分かる。

4. 薬師寺氏在所としての茨木(表2)

前節で記したように、摂津国人一揆の結果、茨木は薬師寺氏の知行地となる。薬師寺氏の宿所(35)があり、薬師寺氏自身が滞在していることも確認でき(43～45・48)、所用の際には京都と茨木の間を使者が行き来していることが認められる(馬部2018)。

また、文亀元年(1501年)に忠富王が茨木で一泊しており、宿泊施設の存在が窺われる(47)。薬師寺氏が滞在する一方、守護でもある細川政元が延徳2年(1490年・33・34・36～39、註12)・明応2年(1493年・40)・明応8年(1499年・42)に茨木を訪問している。この状況から茨木が摂津国守護所としての役割を担っていたとの指摘もある(今谷1985b)。

永正元年(1504年)には薬師寺元一の乱が起きる。この乱に際して薬師寺元一配下の四宮長能が茨木から神足城、淀城へと移動している(49)(馬部2018)。この乱で薬師寺元一の討伐に功のあった薬師寺長忠が摂津守護代の地位につく。

しかし、永正4年(1507年)に細川政元が家臣に暗殺されると(永正の錯乱)、細川京兆家内部での家督争いが起き、細川澄之派であった薬師寺長忠方の茨木城が薬師寺万徳丸(元一の子)によって落とされている(54)。

5. 細川京兆家内訌期～郡山合戦(表3)

永正の錯乱以降、北摂は京兆家内の争い、三好長慶の台頭、足利義昭・織田信長と三好三人衆との対立など、激しい戦いの舞台となる。

永正8年(1511年)に細川高国と細川澄元の間で行われた和泉国深井合戦では摂津国人が列記

表3 茨木氏・茨木城関係一覧表（永正5年～元亀2年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
55	永正5年 (1508年)	5月26日	後法成寺閏白記	芥川信方と舎弟の左衛門尉が殺害される。	『後法成寺閏白記』一	馬部2018 第二部第一章
56	永正8年 (1511年)	6月6日	瓦林政頼記	「摂津国衆上下郡ノ旁池田伊丹三宅茨木安威福井太田入江高槻」	『統群書類従・第二十輯上』	深井合戦
57	永正11年 (1514年)	2月27日	今西家文書195 「茨木家後避渡状」	茨木平左衛門尉家俊が未進の神供銭の代償として「六条一り八坪」の土地を目代に避渡す。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
58	永正12年 (1515年)	正月吉日	今西家文書70 「御神供米銭毎月取納帳」	茨木平左衛門方に「貞久・為重・為弘」が見える。		
59		—	今西家文書73 「御神供納帳」	「茨木方」が1か所見える。		
60	永正13年 (1516年)	—	今西家文書71 「御神供納帳」	「茨木方」が1か所見える。		
61	永正14年 (1517年)	正月吉日	今西家文書84 「御神供米銭毎月納帳」	茨木平左衛門尉方に「貞久・為重・為弘」が見える。		
62	永正17年頃 (1520年)	—	十念寺文書	細川高国の近習に「茨木藤次郎秀俊」が見える。	馬部2018 第一部第二章	
63	大永3年 (1523年)	1月7日	後法成寺閏白記	「茨木」人日御祝で近衛尚通を訪問する。	『後法成寺閏白記』三	
64	大永4年 (1524年)	—	今西家文書85 「目代方領家御指出帳」	「忠末」・「則任」に茨木分が確認できる。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
65	大永5年 (1525年)	7月19日	実隆公記	茨木藤右衛門が細川植国の使者を務める。	『実隆公記』巻六下	
66	大永7年 (1527年)	2月4日	細川両家記	「摂州上郡芥川城。太田城。茨木城。安威。福井。三宅城悉く方々へ落行」	『群書類従・第二十輯』	
67	享禄3年 (1530年)	正月7日	後法成寺閏白記	「茨木又三郎」人日御祝で近衛尚通を訪問する。	『後法成寺閏白記』三	
68		正月11日	後法成寺閏白記	「茨木備中守」近衛尚通を訪問する。		
69	享禄4年 (1530年)	正月7日	後法成寺閏白記	「茨木又三郎」人日御祝で近衛尚通を訪問する。		
70		12月21日	後法成寺閏白記	「茨木炭一荷進上之」		
71	享禄5年 (1532年)	正月11日	今西家文書88 「御神供西米銭毎月取納帳」	茨木方に「貞久・為重・為弘」が見える。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
72		8月24日	本福寺明宗跡書	大坂本願寺を細川晴元方が攻める中に「イハラキ」が見える。	『大系真宗史料』文書記録編3	
73	天文元年 (1532年)	12月22日	細川両家記	「摂州上郡武士衆、一味して。富田道場此外所々焼失なり。」	『群書類従・第二十輯』	天文一向一揆
74	天文4年 (1535年)	7月26・27日	私心記（堺本）	「津国茨木敵へ行」（東大本は「津田茨木敵へ行」）	『大系真宗史料』文書記録編10	
75	天文16年 (1547年)	3月8日	天文日記	細川晴元、「就茨木在陣所遣之也」	『大系真宗史料』文書記録編9	三宅城攻め
76	天文17年 (1548年)	10月28日	細川両家記	三好長慶方として「入江茨木孫次郎」がみえる	『群書類従・第二十輯』	江口の合戦
77		—	今西家文書112 「天文十七年未進帳」	茨木分の未進として「砦石」が計上される。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
78	—	今西家文書109 「御供米未進帳」	茨木方の未進分として「砦石」が計上される。			
79	—	今西家文書110 「天文十八年未進帳」	茨木分の未進として「砦石」が計上される。			
80	天文22年 (1553年)	6月15日	今井用水争論裁許記録写	「茨木甚助長吉」が差出人に名を連ねる	『長岡京市史』資料編三	今里村 二
81		—	今西家文書113 「天文二二年納帳」	茨木分として五斗が計上される。	『春日大社南郷目代 今西家文書』	
82	天文24年 (1555)	2月10日	大徳寺真珠庵文書914-5 「大徳寺領要書案」	「茨木平左衛門尉長綱」が差出人	『大徳寺文書別集 真珠庵文書之七』	
83	永禄11年 (1568年)	9月30日	細川両家記	「然は上郡高槻の入江方茨木方も御所様へ被参候上は一國平均也。」	『群書類従・第二十輯』	足利義昭上洛時
84		10月11日	針聞書	「摂州住人 上郡 茨木二介元行」	長野2007a・b	
85	永禄12年 (1569年)	正月4日	信長公記 卷二 「六条合戦の事」	桂川での戦いにおいて、後巻として「茨木」がみえる。	『新訂 信長公記』	六条合戦 (本園寺合戦)
86		9月	今新流鍼法伝書	「摂津州住人 今新流 茨木二介元行」	長野2007a・b	
87	永禄13年 (1570年)	8月27日	細川両家記	「信長一味方」として「茨木佐渡守」がみえる。	『群書類従・第二十輯』	
88		10月3日	三浦講中文書	「又茨木城者、以調略令合参候」	『大系真宗史料』文書記録編12	野田・福島戦の戦い
89		10月20日	信長公記 卷三 「志賀御陣の事」	「伊丹・塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相拘へ」	『新訂 信長公記』	
90	元亀2年 (1571年)	8月28日	言継卿記	「茨木兄弟以下三百人討死」	『言継卿記』第四	郡山合戦 (白井河原の戦い)
91			中川家譜覚書	「茨木の城主佐渡守」	『大日本史料』第十編之六	
92		8月29日	尋憲記	「則高ツキ、イハラキ、シユク城、里城、以上四ツ落居之由」		
93			ルイス・フロイス書簡117	「奉行の兄弟の子である十六歳の甥（茨木重朝）」	『十六・七世紀イエズス会日本報告集』	

される中に「茨木」が見られる (56)。

これ以降、元龜2年(1571年)の郡山合戦(白井河原の合戦)に至るまで、様々な戦いに茨木氏の姿が認められる。茨木氏が茨木城に復帰していた可能性も考えられる。

しかし、大永7年(1527年)、細川晴元方の柳本賢治により、「芥川城。太田城。茨木城。安威。福井。三宅城」が落城する(66)。

天文元年(1532年)、山科本願寺の陥落後、「摂州上郡武士衆」が富田道場などを焼き討ちし、大坂本願寺を攻めている(72・73)。しかし、この後の天文4年(1535年)、「茨木」が本願寺方から細川晴元方に寝返り、「水田(吹田か)」などを焼き討ちしており(74)、この間には、本願寺方へ与していたのかもしれない。

天文16年(1547年)、細川氏綱方の三宅城を攻めるために細川晴元が茨木に在陣する(75)。

天文17年(1548年)、三好長慶と三好宗三の対立に際し、三好長慶が擁立した細川氏綱に摂津上郡の国人が従っている(76・註13)。

上記から判断すると、茨木氏は永正8年～大永7年は細川高国、天文元年～天文17年は細川晴元、天文17年からは三好長慶に従っていたと考えられる。

永禄11年(1568年)の足利義昭・織田信長の上洛時に茨木城も落城している(83)。この頃は三好三人衆の勢力下に入っていたのであろう。

永禄12年(1569年)、茨木氏は本国寺合戦に足利義昭方として加勢し、他の摂津国人とともに桂川で三好三人衆と戦っている(85)。

永禄13年(1570年)、三好三人衆との野田・福島合戦に足利義昭方として茨木佐渡守が参陣している(87)。この直後、大坂本願寺から攻撃を受けるが、茨木城は京都への道筋の守りを固めている(89)。この間、本願寺から茨木城へ調略の手が伸びている(88)。

元龜2年(1571年)の郡山合戦で和田惟政方の茨木兄弟が討死にし(90・註14)、茨木城も落城する(92)。これ以降、茨木氏の活動は見られなくなる。

6. 永正～天文年間の茨木氏(表3)

前節では合戦の記録に現れる茨木氏と茨木城について述べた。一方、この時期には政権中枢で茨

木氏の活動を確認できる。第2節で述べた細川氏内衆としての茨木氏の系譜を受け継いでいるのであろう。

細川高国期では、永正5年(1508年)に芥川信方と共に殺害された左衛門尉は茨木氏と考えられている(55・馬部2018)。この他、永正17年(1520年)頃に細川高国の近習として茨木藤次郎秀俊(62)、大永5年(1525年)に細川植国の使者を務めた茨木藤右衛門(65)が認められる。

細川晴元・細川氏綱期には茨木長隆が登場する。茨木長隆が現れる史料や、発給した文書は把握しえた限りで200件を超える。その活動期間は永正8年(1528年)～天文23年(1554年)に及ぶ。ただし、今回は紙幅の都合で表には含めていない(註15)。

長隆の他に、近衛尚通を訪問した茨木又三郎(67・69)・茨木備中守(68)や、今井用水の争論に関わった茨木甚助長吉(80)、大徳寺真珠庵へ所領に関する文書を発給した茨木平左衛門尉長綱(82)がいる。

この他、年不詳のため表に含めていないが、茨木孫右衛門尉長康(大徳寺文書1393・1394号)、茨木四郎右衛門尉正重(大徳寺文書2179・2180号)が確認できる(註16)。

また、「赤井家清等連署書状案」(醍醐寺文書1765号)に茨木左衛門尉が確認でき、「今村慶満外七名連署状」(東寺百合文書い函127号)に勝龍寺城普請に際して「於御不審者、茨木へ可有御尋候」とある(註17)。

更に、鍼治療を行う医師である「茨木二介元行」がいる。上郡の住人であり、『針聞書』・『今新流鍼法伝書』という二つの書籍を執筆した人物である(84・86)。

7. 荒木村重・中川清秀期(表4)

前述したように郡山合戦で、茨木兄弟が討死にし、茨木城が落城する。この後、摂津は荒木村重の支配下に入る。茨木城主は荒木村重とみなされていたようで(94)、中川清秀が預かる形であったと考えられる。

天正3年(1575年)、薩摩の島津家久が上京途上に、茨木城の姿を認めている(95)。

天正6年(1578年)、中川清秀は荒木村重に従って織田信長から離反し、石田伊予・渡辺勘太夫

と共に茨木城に籠城する(96・98)。この離反には、荒木村重と毛利氏との連携も認められる(97)。しかし、中川清秀は11月9日に石田・渡辺の兩名を追い出して、信長に降伏する(98)。この後、茨木城の守りには福富平左衛門・下石彦衛門・野々村三十郎の3名が入っている(99)。

翌天正7年(1579年)、羽柴秀吉が中川清秀と義兄弟の契約をし、清秀の本知の安堵と、河内・摂津欠郡の知行を信長に認めてもらえるようにするとの起請文を出している(100)。このことから天正7年6月段階では、中川清秀が茨木城を安堵されるかは決まっていなかったのであろう。

同年9月28日、織田信長が茨木城を初めて訪ねている(101)。

天正9年(1581年)、上洛途中に羽柴秀吉と出会った津田宗及が、茨木城で茶器お披露目の茶会に出席している(102)。

天正10年(1582年)、本能寺の変後に中川清秀から箕面寺に禁制が出されている(103)。これにより、茨木周辺に中川氏の支配が及んでいたことがわかる。

しかし、天正11年(1583年)の賤ヶ岳合戦で中川清秀は討死にし、中川秀政が継ぐ。中川秀政宛の秀吉書状が複数確認でき、茨木城周辺を統治

していた様子が窺える(104・106・107)。

天正13年(1585年)に摂津全域が秀吉の直轄領となり、中川秀政は三木へ移封される(106・108)。茨木城には代官として安威重胤(註18)が入る。

8. 秀吉直轄領期(表4・5)

天正13年(1585年)、安威重胤の安堵状が瀧安寺及び勝尾寺に出されている(105・109・110)。105のみ7月であるが、中川秀政の移封以前になるため、10月の誤りであろう。

天正16年(1588年)、秀吉が鷹狩りのために訪れている(111)。秀吉は天正16年から18年にかけて、茨木を経由して上洛していることが確認できる(112・114・115)。111と113の書状から、福田氏は秀吉の側室である茶々(淀殿)がこの頃、茨木城に滞在していた可能性を指摘している(福田2007)。中西氏は秀吉第一子の鶴松が茨木城で生まれた可能性をも指摘している(中西2015)。

鷹狩りには細川政元(38)、徳川家康(118・119)も訪れており、茨木の近辺に良好な鷹場があったのだろう。

天正18年(1590年)に、代官は安威重胤から河尻秀長(116・117、註19)に交替する。この

表4 茨木氏・茨木城関係一覧表(天正元年～天正13年)

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
94	天正元年(1573年)	4月4日	ルイス・フロイス書簡128	「茨木(城)主の荒木信濃」	『十六・七世紀イエズス会日本報告集』	上京焼き討ち
95	天正3年(1575年)	4月16日	家久公御上京日記	京へ向かう途中に「右方ニいはらきといへる城有」と記述。		新日本古典籍統合データベース参照
96		秋	立入左京亮入道隆佐記	「荒木村重叛逆一類刑罰事」	『続群書類従・第二十輯上』	
97		11月14日	毛利家文書834	「為始井原木堅固令」	『大日本古文書』家わけ八ノ三	
98	天正6年(1578年)	11月9日～11月24日	信長公記 卷十一「荒木撰津守逆心を企て並びに伴天連の事」及び卷十二「伊丹城相果たし御成敗の事」	荒木村重が織田信長から離反した際に、茨木城と高槻城も離反する。茨木城には石田伊予・渡辺勘大夫・中川瀬兵衛が籠城するが、二十四日に石田・渡辺を追い出し、開城する。	『新訂 信長公記』	荒木村重の離反
99		12月11日	信長公記 卷十一「丹波国波多野館取り巻くの事」	「茨木城御番手衆 福富平左衛門、下石彦右衛門、野々村三十郎」		
100	天正7年(1579年)	6月5日	豊臣秀吉文書集196	羽柴秀吉が中川清秀が義兄弟の契約をし、本知安堵と河内・摂津欠郡の知行を認めてもらえるように後押しすることを誓う	『豊臣秀吉文書集』一	
101		9月28日	信長公記 卷十二「北畠中將殿御折檻状の事」	織田信長「其の日、初めて茨木へ御立寄り」	『新訂 信長公記』	
102	天正9年(1581年)	12月27日	天王寺屋会記	上洛の途中、羽柴秀吉と会い、茨木城において秀吉が拝領した道具で茶会を催す。	『天王寺屋会記』六	
103	天正10年(1582年)	9月	滝安寺文書22「中川清秀禁制」	中川清秀が箕面寺に禁制を出す。	『箕面市史』史料編二	
104	天正12年(1584年)	11月20日	豊臣秀吉文書集1272	中川藤兵衛あて「輝元息女上洛候、然者郡山一夜之可為泊候」	『豊臣秀吉文書集』二	
105		7月5日	勝尾寺文書1123「安威之統書状写」	勝尾寺に対する安堵状	『箕面市史』史料編二	十月か?
106		閏8月	豊臣秀吉文書集1597	中川秀政あて 三木への移封に際しての知行目録	『豊臣秀吉文書集』二	
107		9月2日	豊臣秀吉文書集1611	中川秀政あて 摂津国「豊島・太田両郡」の「案内」を求める		
108	天正13年(1585年)	9月3日	貝塚御座所日記	「中川藤兵衛播州三木へ」	『大系真宗史料』文書記録編14	
109		10月27日	勝尾寺文書1124「安威之統書状写」	勝尾寺に対する安堵状	『箕面市史』史料編二	これ以前に安威重胤が代官として赴任か
110		10月27日	滝安寺文書23「安威之統書状」	箕面寺に対する安堵状		

年に摂津が秀吉第一子の鶴松の扶養領とされており、代官の交替もこれに関連している可能性が考えられようか。

河尻秀長は慶長4年(1599年)に、徳川家康が鷹狩りのために茨木城に滞在した際に、家康の饗応にあたっている(118)。『廢絶録』(121)に「茨木一万石」とあり、関ヶ原合戦で西軍に属したため、改易されたようである(註20)。

徳川家康は慶長4年(1599年・118)の他、慶長5年(1600年・119)にも鷹狩りのために茨木を訪れている。

9. 片桐貞隆期(表5)

河尻秀長の改易後、片桐貞隆が入る(122・註21)。慶長6年(1601年)に箕面寺及び勝尾寺に対して、両寺の年貢は安威重胤と河尻秀長の折紙を引き継ぐことを伝えている(123・124)。

慶長9年(1604年)には、梅林寺に対して地

子を免ずる書状を出している(125)。

摂津全域を描く『慶長十年摂津国絵図』に「茨木城」が見える(茨木市立文化財資料館2016・126)。

慶長19年(1614年)には大坂冬の陣が勃発する。きっかけの一つとして、大坂城内で孤立した片桐且元・貞隆兄弟が10月1日に茨木城へ退去したことがある(127・128)。

10月12日に、片桐且元は堺に援軍を送るが敗北する(129)。10月15日には茨木城が大坂方から攻められる可能性が生じ、京都所司代に助けを求めており(130)、17日に石河定政が援軍として到着している(131)。

茨木城は元和の一國一城令で破却されたとされているが、冬の陣後に南部晴政に茨木城の破却命令が出されている(132)。ただし、冬の陣と夏の陣の間は4ヶ月程しかないので、実際の作業は夏の陣後になったかもしれない。

表5 茨木氏・茨木城関係一覧表(天正16年～元和10年)

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
111	天正16年 (1588年)	10月5日	豊臣秀吉文書集2625	いわあて書状「八日の五つころ、いはらきへこし候ように申しつけ候て」	『豊臣秀吉文書集』三	
112		11月27日	言経卿記	「殿下摂州茨木へ御出、直二明日歇御上洛也云々」	『言経卿記』三	
113	年不詳	—	豊太閤真蹟集22	「いはらきへつれ候物はかりつれ候て」茶々が茨木へ行ったことがあることを示す。	福田2007	
114	天正17年 (1589年)	3月13日	言経卿記	「殿下御上洛也云々、先茨木、次淀城、次御上洛了」	『言経卿記』三	
115	天正18年 (1590年)	正月9日	言経卿記	「殿下上洛了、茨木通也云々」	『言経卿記』四	
116		拾月8日	勝尾寺文書1122 「河尻肥前守書状写」	勝尾寺に対する安堵状	『箕面市史』史料編二	これ以前に代官が交替したと思われる。
117		12月13日	滝安寺文書24 「河尻肥前守書状」	箕面寺に対する安堵状	『箕面市史』史料編二	
118	慶長4年 (1599年)	12月3日～5日	朝野習聞哀藁	徳川家康、鷹狩りのため茨木城へ。河尻秀長の饗応を受ける。十二月五日に大坂へ帰る。	『朝野習聞哀藁』第九巻	
119	慶長5年 (1600年)	正月9日	葬日記	「内府家康、茨木江鷹野被出、暮二及帰城」	『葬日記』第一	
120		3月15日	河尻肥前守秀長寺屋敷地寄進状	河尻秀長 梅林寺に寺屋敷地を寄進	『新修 茨木市史』第五巻	
121		9月15日以降	廢絶録	河尻秀長関ヶ原合戦後に改易(摂州茨城 一万石)	『恩栄録・廢絶録』	
122		9月15日以降	寛政重修諸家譜360	片桐貞隆「摂津国茨木城の守衛を命ぜらる」	『寛政重修諸家譜』第六	
123	慶長6年 (1601年)	9月23日	滝安寺文書2 「片桐主膳正判物」	箕面寺の年貢についての文書「安威摂津守、河尻肥前守両人の折紙に基づくことを確認」	『箕面市史』史料編三	
124		11月11日	勝尾寺文書2 「片桐主膳正判物」	勝尾寺の年貢についての文書「安威摂津守、河尻肥前守両人の折紙に基づくことを確認」	『箕面市史』史料編三	
125	慶長9年 (1604年)	9月15日	梅林寺文書	梅林寺に対する安堵状	『大日本史料』第十二編之二	
126	慶長10年 (1605年)	—	慶長十年摂津国絵図	茨木城の記載が確認できる。	茨木市立文化財資料館2016	
127	慶長19年 (1614年)	10月1日	田中文書ほか	片桐且元・貞隆が大坂城を退去し、茨木城へ入る。	『大日本史料』第十二編之十五	大坂冬の陣
128		10月7日	駿府記ほか	片桐且元・貞隆が茨木城へ退去したことを報告する。		
129		10月12日	駿府記ほか	大坂方が堺を攻撃したため、片桐且元が堺へ援軍を出すのが敗北する。	『大日本史料』第十二編之十五	
130		10月15日	時慶卿記ほか	大坂方が茨木城を攻撃するとの噂を聞き、板倉勝重に援軍を求める。		
131		10月17日	言経卿記	石河定政が援軍として茨木城へ入る。	『言経卿記』上	
132		—	譜牒餘録	南部家へ茨木城を破却する命令が下される	『譜牒餘録』中	
133	元和4年 (1618年)	9月	茨木御城跡開改之帳	茨木城廢城後の開墾状況を示す		
134	元和10年 (1624年)	9月28日	間宮三郎右衛門光信梅林寺地子免許状	片桐貞隆の時に梅林寺の地子を免除していることを確認	『新修 茨木市史』第五巻	
135			間宮三郎右衛門光信妙徳寺地子免許状	片桐貞隆の時に妙徳寺の地子を免除していることを確認		

10. まとめ

前節までに茨木城に関する史料を管見の範囲で集成した。その結果、茨木城の存続期間は15世紀後半～17世紀前半の約150年近くに及ぶことを確認した。ただし、初現についてはさらに遡る可能性もある。

茨木城の城主として、茨木氏、薬師寺氏、荒木氏、中川氏、羽柴氏（代官として安威重胤、川尻秀長）、片桐氏が確認できた。

細川政元期には守護・守護代がしばしば茨木に滞在していたことが確認できた。この時期には摂津上郡における拠点であったといえよう。

また、細川政元・羽柴秀吉・徳川家康が鷹狩りのために訪れている。細川政元段階では京都から近いこと、秀吉・家康期には大坂と京都の中間地点に位置することが重宝されたのであろう。

一方、城の構造は全く不明といってよい状態であり、時期による変遷も明らかにし得ない。しかしこの間は、鉄砲の導入を始めとして、武器及び戦術の変化が著しく、城の構造もそれに応じた変化があったと思われる（註22）。場合によっては、城の位置が移動しているかもしれない。これに迫るには、考古学の調査成果が必要となるが、現時点ではその姿に迫ることができていない。しかし、茨木が東西の交通の要衝に位置するため、攻防の対象となったとは確かである。

今後は、茨木城存続時期の遺構・遺物の分布を確認していくことによって、該期の様相を示していくことが必要となる。

註

1) 茨木城は茨木遺跡内に位置すると考えられており、明治時代の字切図から復元が試みられている（豊田2007）。また、馬部氏は、「茨木城跡開改帳（133）」と地籍図を用いて廃城時の姿を復元している（馬部2016）。

現時点では、発掘調査の成果として、明確な遺構を確認するには至っていない。これは、茨木遺跡が既に宅地化しており、大規模な調査を実施する機会が乏しく、面的な遺構の把握が進んでいないことによる。

平成18年度調査では、箆欄間・明障子などの格式の高い建物に使用された建具が出土している（茨木市教育委員会2007）。しかし、これらが茨木城に伴うものかは検討が必要とされている（清水2018）。

2) 『新修茨木市史』第四巻および補遺編では、永禄12年（1569年）まで、第五巻では慶長5年（1600年）からの史料を掲載している。しかし1570～1600年までの史料は資料編では掲載されていない。

3) この他に年不詳文書だが、勝尾寺文書789「勝尾寺田畠目録」に「水尾深水田。一反 八斗代 今者二斗代也作人荊切馬允」とみえる。

4) 文明14年（1482年）に摂津国人一揆で「伊ハラ木父子以下六七人自害」させられた以降にも「茨木方」が認められるので、細川氏内衆の系統が携わっている可能性がある。

5) 『応仁記』「井島野合戦之事」。この時、茨木氏は現れないが、摂津国人が大内軍と対峙しているため、この戦いにも参加していた可能性がある。この戦いでは、池田氏が西軍に降伏、三宅氏が西軍方に寝返るなどして、戦線が崩壊している。大内軍は八万の大軍との伝聞もある（『経覚私要抄』応仁元年6月29日条）。

6) 『大乘院寺社雑事記』 文明11年閏9月8日、10月29日条

7) 律令期の行政区分では、島上郡（現在の高槻市・島本町）・島下郡（現在の茨木市・摂津市・吹田市・箕面市の一部）の範囲が相当する。

8) 『後法興院記』 文明14年3月13日条

9) 『大乘院寺社雑事記』 文明14年6月18日条

10) 『大乘院寺社雑事記』 文明14年10月16日条

11) 春日おん祭りの流鏝馬は興福寺領荘園の武士が動員されるが、大和以外の武士は「流鏝馬米」と呼ばれる形での負担が行われた（安田2016）。

12) 表には含めなかったが、『蔭涼軒日録』延徳2年12月20日条に「細川右京兆於摂州可被立屋形也。彼在所安威云。有深淵。曰蛇鬼淵魔所也。観此攸綿縹云々。」とあり、安威に屋形を建てようとしたらしい。

13) 天野氏はこの部分を「入江、茨木孫次郎」と区切っている。83で「高槻の入江方茨木方」となっていることから、こちらも分けた方が良いのかもしれない。また、「茨木孫次郎」は16でも確認できることから、系譜上の関係があるのかもしれない。

14) 91には「茨木佐渡守」が登場しており、90に見える「茨木兄弟」のいずれかが茨木佐渡守の可能性もある。また、93では、「奉行（和田惟政）の兄弟の子である十六歳の甥」との記述があるが、（村上1928・松田1998）では「茨木重朝」との注記が入る。一方『大日本史料』第十編之六では、この注記は記されていない。そのため、この「甥」が茨木氏と関係のある人物

かどうかは不明である。

15) 茨木長隆に関連する史料は、『大日本古文書』大徳寺文書別集、(今谷 1985) などから収集した。

16) 茨木長吉・茨木正重は、一連の文書および同一文書に茨木長隆の名前が記されている例がある。

17) 両書状ともに「四手井家保」の署名があり、近い時期に作成された書状であろう。なお、四手井家保は松永久秀の家臣であり、今村慶満は永禄5年(1562年)頃まで活動が確認できる三好氏の家臣である。両者が署名していることから、天文17年(1548年)の江口の合戦から永禄5年までのものであろう。この時期は茨木長隆の活動期とも重なるので、「茨木」は長隆の可能性もあろうか。

18) 安威重胤の実名については「了佐」「守佐」「之統」など様々に読まれているが、(馬部 2016) に従う。ただし、表の文書名は引用文献の記載に従った。

19) 河尻秀長の実名については(馬部 2016) に従う。ただし、表の文書名は引用文献の記載に従った。

20) なお、『恩栄録』では、片桐且元が茨木から斑鳩に移封になったとされているが、河尻秀長は慶長5年3月まで一貫して代官を務めており(120)、成り立たない。

21) 一般的に茨木城主として、兄の片桐且元が挙げられ、貞隆は代官とされている。しかし、黒田氏は、城主は貞隆としている(黒田 2017)。確かに122～125でも貞隆が安堵状等を出しており、且元の名前は見えない。また、「大坂奉行衆等交名覚」(勝尾寺文書 169)(箕面市役所 1969)では、安威重胤、河尻秀長に続いて片桐貞隆が見えている(註 21)。また、秀吉は且元と貞隆それぞれに書簡が出しており(豊臣秀吉文書集 4550・4551 など)、兄弟は別々の家と捉えられていたと考えられる。これらのことから、且元は茨木の支配に関わっていない可能性がある。

22) 隣接する高槻城は和田氏段階では単郭方形の城とされている(高槻市立しろあと歴史館常設展示)。おそらく、茨木城も荒木氏(中川氏)以前は同様の姿であったと推測される。また、天正13年(1585年)に羽柴氏の直轄領となり、代官の統治となっていることから、それ以降には城郭として発展する必要はなかったであろう。このことから、惣構の様相が形成された時期は元亀2年(1571年)から天正13年までと考えられよう。

参考文献

史料

茨木市 2003『新修茨木市史』第四巻 史料編

茨木市 2009『新修茨木市史』第五巻 史料編

茨木市 2014「新修茨木市史 第四巻 補遺」『新修茨木市史年報』第十二号

桑田忠親校注 1997『新訂信長公記』新人物往来社

桑山浩然校訂 1986『室町幕府引付史料集成』下巻「賦引付二」

国書刊行会 1915『言継卿記』第四

国立公文書館内閣文庫 1974『譜牒餘録』中

史籍研究会 1983『朝野舊聞哀藁』第九巻

真宗史料刊行会 2010～2017『大系真宗史料』文書記録編 3・9・10・12・14

続群書類従完成会 1927『続群書類従・第二十輯上』

「瓦林政頼記」、「立入左京亮入道隆佐記」

続群書類従完成会 1928『続群書類従・補遺一』「満濟准后日記(下)」

続群書類従完成会 1930『群書類従・第二十三輯』武家部「犬追物手組日記」

続群書類従完成会 1932『群書類従・第二十輯』合戦部「応仁記二」、「応仁別記」、「細川両家記」

続群書類従完成会 1932『群書類従・第二十九輯』雑部「文安年中御番帳」

続群書類従完成会 1962『実隆公記』巻六下

続群書類従完成会 1964『新訂寛政重修諸家譜』第六

続群書類従完成会 1970『舜旧記』第一

続群書類従完成会 1971『熊野那智大社文書』第一

続群書類従完成会 1972『北野社家日記』第二

続群書類従完成会 1984『言国卿記』第七

永島福太郎編 1989『天王寺屋会記』六 淡交社

長岡京市役所 1993『長岡京市史』資料編三

名古屋市立博物館 2015～2017『豊臣秀吉文書集』一～三

大洋社 1934『鹿苑日録』巻一

東京大学史料編纂所 1901～1938『大日本史料』第八編之一・十、第十編之六、第十一編之一、第十二之二・十五

東京大学史料編纂所 1922『大日本古文書』家わけ八ノ三 毛利家文書三

東京大学史料編纂所 1925・1929『大日本古文書』家わけ十 東寺文書一・二

東京大学史料編纂所 1954・1961『大日本古文書』家わけ十七 大徳寺文書三・六

- 東京大学史料編纂所 1962・1964『大日本古記録』「言経卿記」三・四
- 東京大学史料編纂所 1974『大日本古文書』家わけ十九ノ八 醍醐寺文書八
- 東京大学史料編纂所 1995『大日本古記録』「言緒卿記(上)」
- 東京大学史料編纂所 1989～2007『大日本古文書』家わけ十七 大徳寺文書別集眞珠庵文書之一～七
- 東京大学史料編纂所 2001・2007『大日本古記録』「後法成寺関白記」一・三
- 豊中市教育委員会 2004『春日大社南郷目代 今西家文書』
- 藤野保 校訂 1970『恩栄録・廢絶録』近藤出版社
- 松田毅一 監訳 1991『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 同朋舎
- 松田毅一 監訳 1998『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻 同朋舎
- 箕面市役所 1972『箕面市史』史料編二
- 箕面市役所 1969『箕面市史』史料編三
- 村上直次郎 訳 1928『耶蘇会士日本通信』下巻 雄松堂書店
- 明治書院 1971『圖書寮叢刊 晴富宿禰記』
- 明治書院 1977『圖書寮叢刊 九条家文書』七
- 八木書店 2008『経覚私要鈔』第7
- 臨川書店 1967『続史料大成』「伯家五代記・後奈良天皇宸記」
- 臨川書店 1967『続史料大成』「後法興院記」一
- 臨川書店 1967『続史料大成』「大館常興日記」一～三
- 臨川書店 1978『増補史料大成』「蔭涼軒日録」五
- 臨川書店 1978『増補史料大成』「大乘院寺社雜事記」六・七・九・十一・十二
- 臨川書店 1978『増補史料大成』「多聞院日記」一・五
- 論文等
- 天野忠幸 2016『三好一族と織田信長 「天下」をめぐる覇権戦争』戎光祥出版
- 石本倫子 2009「戦国期摂津における国人領主と地域－摂津国人一揆の再検討を通して－」『ヒストリア』第213号 大阪歴史学会 pp.130-157
- 茨木市教育委員会 2007「3. 茨木遺跡」『平成18年度発掘調査概報』 pp.37-63
- 茨木市立文化財資料館 2016『絵図で楽しむ茨木－江戸時代の村を巡る－』
- 今谷明 1985a「細川・三好体制研究序説－室町幕府の解体過程－」『室町幕府解体過程の研究』 pp.351-446
- 今谷明 1985b「畿内近国に於る守護所の分立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 国立歴史民俗博物館 pp.173-216
- 黒田基樹 2017『羽柴家崩壊 茶々と片桐且元の懊悩』平凡社
- 清水邦彦 2018「茨木遺跡出土建具の評価をめぐる現状と課題」『茨木市立文化財資料館館報』第3号 茨木市立文化財資料館 pp.1-5
- 中西裕樹 2015「茨木城」『大阪府中世城館事典』戎光祥出版 pp.42-43
- 中西裕樹 2019『戦国摂津の下克上』高山右近と中川清秀 戎光祥出版
- 長野仁 2007a「スタマック・モンスター大集合！」『戦国時代のハラノムシー『針聞書』のゆかいな病魔たち』国書刊行会 pp.82-103
- 長野仁 2007b「戦国時代の鍼灸ムーブメント 古来、ハリとムシとハラは因果な仲間」『虫の知らせ』ジエイ・キャスト pp.41-63
- 中村博司 2007「豊臣秀吉と茨木城」『よみがえる茨木城』清文堂 pp.25-63
- 仁木宏 2007「戦国・信長時代の茨木の町と茨木氏」『よみがえる茨木城』清文堂 pp.3-23
- 豊田裕章 2007「茨木城・城下町の復元案と廢城の経過」『よみがえる茨木城』清文堂 pp.81-113
- 馬部隆弘 2016「第一節 織豊期の茨木」『新修 茨木市史』第二巻通史Ⅱ 茨木市 pp.2-55
- 馬部隆弘 2018『戦国期 細川権力の研究』吉川弘文館
- 福田千鶴 2007『淀殿』ミネルヴァ書房
- 福留照尚 2012「第10章 室町幕府・摂津守護細川体制下の茨木」・「第11章 中世末期の茨木」『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ 茨木市 pp.712-812
- 古野貢 2013「細川氏内衆の存在形態」『地域史研究』113 尼崎市立地域研究史料館 pp.5-9
- 森田恭二 2009「摂津国人茨木氏の盛衰」『帝塚山学院大学研究論集』第44集 帝塚山学院大学 pp.15-31
- 安田次郎 2016「第二章 流鏑馬と武士 1 初期の流鏑馬」『祭礼で読み解く歴史と社会 春日若宮おん祭りの900年』山川出版社 pp.25-27